豊後大野市内遺跡
発掘調査概要報告書 4

— 平成 23 年度・平成 24 年度調査 —

2014

豊後大野市教育委員会

例　　言

1、本書は平成23年度・平成24年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡事業の確認調査概要報告書である。

2、調査の体制は以下のとおりである。

調査指導　福永伸哉（大阪大学大学院教授）
田中裕介（別府大学教授）
小林昭彦（大分県教育庁文化課参事　平成23年度）
佐藤晃洋（大分県教育庁文化課参事　平成24年度）
後藤晃一（同 副主幹）

調査主体　久保田正治（豊後大野市教育委員会教育長）
西山清孝（同 教育次長　平成23年度）

調査担当　阿南鋼一（生涯学習課長　平成23年度）
渡邊久洋（生涯学習課長　平成24年度）
原嶋宏司（生涯学習課文化財係長）高野弘之 諸岡郁 豊田徹士（同 文化財係）

このほか、高橋克壽氏（花園大学教授）、下村智氏（別府大学教授）、杉井健氏（熊本大学准教授）、吉田和彦氏（杵築市教育委員会）のご視察ご指導をいただいた。

3、漆生古墳群の調査における遺構実測およびトレース、墳丘測量図作成については別府大学考古学研究室の協力をいただいた。写真撮影は調査員で行い、調査基準点設置は㈱埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した。

4、杉園中原遺跡の遺物実測は雅企画有限会社に委託した。

5、本書の執筆は「Ⅱ漆生古墳群」の測量調査については玉川剛司氏（別府大学文化財研究所）、発掘調査については田中裕介氏より玉稿をいただいた。その他の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目　　次

Ⅰ　はじめに　・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　漆生古墳群　・・・・・・・・・・・・3
　1　調査の経過　・・・・・・・・・・・3
　2　漆生古墳群測量調査　・・・・・・4
　3　漆生古墳群第一次発掘調査　・・13
Ⅲ　陣箱遺跡　・・・・・・・・・・・・23
Ⅳ　桜馬場遺跡　・・・・・・・・・・25
Ⅴ　宮山石幢　・・・・・・・・・・・・26
Ⅵ　高松遺跡　・・・・・・・・・・・・28
Ⅶ　石井庵跡　・・・・・・・・・・・・29
Ⅷ　小原遺跡　・・・・・・・・・・・・30
Ⅸ　荻迫遺跡・杉園中原遺跡・・・・・31

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成17年3月に大野郡7町村が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約500件の指定文化財や約700箇所の周知遺跡数にも表れている。これらの保護について合併前の各町村時代から引継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加している。

豊後大野市教育委員会は国庫補助を得て、農業基盤整備や民間開発等の開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成のため、事前の試掘・内容確認調査を実施している。平成23年度は6箇所、平成24年度は5箇所で調査を実施したが、漆生古墳群は2か年で実施したため、遺跡数としては10箇所である。

遺跡範囲の確認調査として実施した漆生古墳群は、前方後円墳を含む未調査の古墳群であることから遺構遺物の検出を目指した。墳丘測量図の作成や葺石や周溝などの遺構を確認することができ、古墳群についての重要な資料を得ることができた。しかし期間の制約上、一部の古墳では未調査であったこと、詳細な時期を特定できる遺物の確認ができなかったことにより、次年度も継続して行うこととなった。同じく確認調査の細長港跡については遺構の実測のみを行った。

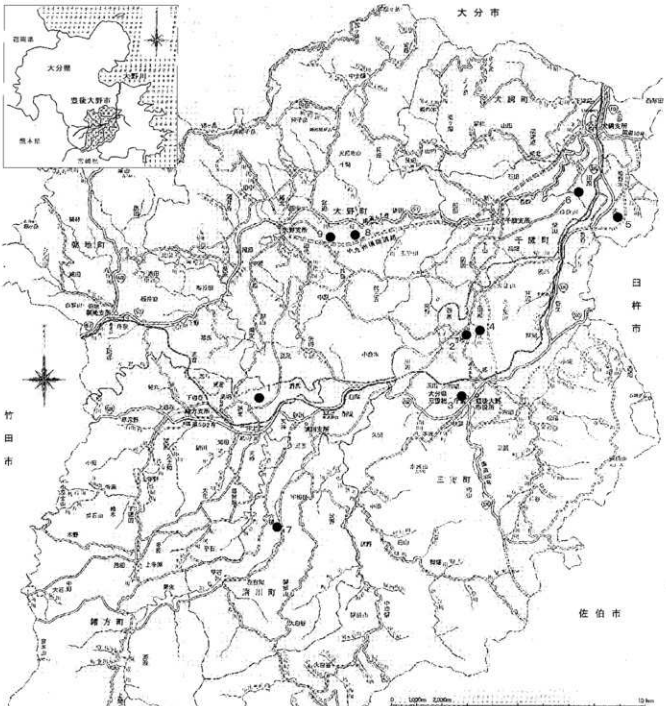
緊急開発に伴う確認調査として、農業基盤整備に伴う高松遺跡、園芸団地造成に伴う荻迫遺跡・杉園中原遺跡、道路建設の宮山石幢・小原遺跡、宅地造成の桜馬場遺跡、施設建設の石井庵跡・陣箱遺跡の計8か所において実施し、そのうち高松遺跡、杉園中原遺跡、陣箱遺跡の3箇所で遺構・遺物を確認した。高松遺跡は攪乱が著しく遺構は壊滅状態のため工事実施となったが、良好に保存されていた陣箱遺跡は本調査、同じく杉園中原遺跡は工法変更により盛土による保存の措置を講じることができた。それ以外の遺跡では今回の調査では遺構・遺物が検出でき、遺跡の痕跡が認められないため、工事実施となった。

2　歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上でみられる。200基を超える竪穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二本木遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化がみられる。しかし墳墓の遺跡は多く、8基の前方後円墳をはじめ、平井側流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの墳墓遺跡の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。条里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が多く所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみであったが、近年加原遺跡で古代の建物群跡などが確認され、郡衙などとの関連が注目される。中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



第１図　平成 23・24 年度豊後大野市内遺跡調査位置図

No.	遺跡名	調査地	発掘調査期間	調査原因
1	漆生古墳群	緒方町越生字大久保ほか	2012.12.06 ～ 2013.02.28	範囲確認調査
2	陣箱遺跡	三重町百枝字陣箱	2011.06.22 ～ 2011.06.24	浄水場建設
3	桜馬場遺跡	三重町市場字市原	2011.09.14 ～ 2011.09.15	宅地造成
4	宮山石幢	三重町百枝字宮山	2011.09.22 ～ 2011.09.22	市道浅水牟礼線改良工事
5	高松遺跡	犬飼町大寒字登口	2011.10.20 ～ 2011.10.21	特用作物振興対策事業(天地返し)
6	石井庵跡	犬飼町田原字石井	2011.12.13 ～ 2011.12.14	福祉施設建設
7	小原遺跡	清川町六種字	2012.07.17 ～ 2012.07.19	市道清水線改良工事
8	荻迫遺跡	大野町杉園字中ノ原	2012.12.10 ～ 2012.12.12	農業基盤整備(菊団地造成)
9	杉園中原遺跡	大野町杉園字中原	2012.12.13 ～ 2012.12.15	農業基盤整備(菊団地造成)

Ⅱ　漆生古墳群

1　調査の経過

緒方町越生区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在し、石棺が露出する古墳２基としてその存在は古くから知られている。字名から「大久保古墳」「城山古墳」の名称で周知遺跡となり、石棺は現状のまま所在している。(1)

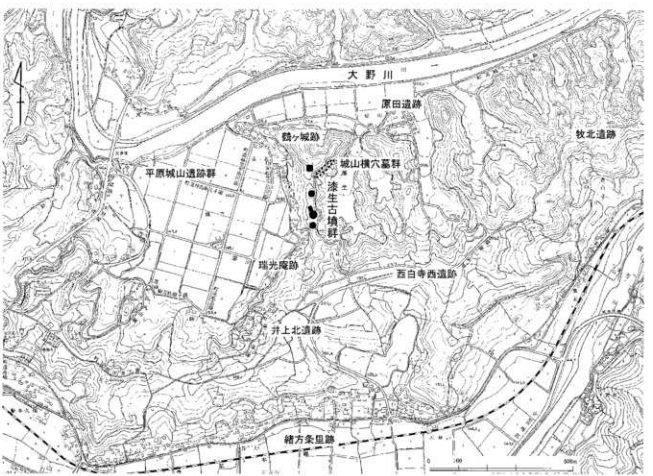
平成４年にその隣接地で前方後円墳が発見されることを契機に現地踏査が行われ、丘陵尾根上に並ぶ４基の古墳群であることが確認された。その際、字大久保に３基所在することから、新発見の前方後円墳を大久保１号墳、石棺が露出している旧「大久保古墳」を大久保２号墳、１号墳の南に古墳と推定される地形上の高まりを大久保３号墳とし、字城山の城山古墳を含めて漆生古墳群と呼称されている。併せて大久保１号墳の墳丘測量や大久保２号墳の石棺実測が行われたものの、築造時期の推定できる出土遺物等は全く知られてないため、大久保２号墳及び城山古墳は石棺の観察から中期古墳、大久保１号墳は墳形による推定で前期古墳とみられている。(2)

遺跡範囲の確認調査として、平成23年度及び24年度に古墳群全体の墳丘測量調査を、平成24年度にトレンチ試掘による第一次調査を実施した。期間の関係上、調査トレンチは大久保２号墳を除く、７箇所約55㎡を設定して実施した。なお、平成25年度の第二次調査は、大久保１号墳前方部及び、大久保２号墳の確認調査として実施している。

註

(1) 日名子太郎「大野郡古墳横穴調査書」『大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯』昭和４年

(2) 田中裕介ほか「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古 第６集』大分県考古学会 1993 年



第２図　漆生古墳群周辺地形図

2　漆生古墳群測量調査

別府大学文化財研究所　玉川剛司

漆生古墳群は、大久保１～３号墳、城山古墳の計４基からなる古墳群である。南北に延びる同一の尾根上に築造されているが、尾根が狭く標高が低くなっている箇所があり、南側グループ（大久保１～３号墳）の一群と北側グループ（城山古墳、城山横穴墓群）とが分断された状況で立地している。
漆生古墳群の墳丘測量図については、平成５年度に大久保１号墳のみ神田、後藤、田中、諸岡、渡部氏らによって作成された（神田・後藤・田中・諸岡・渡部 1993）。この測量調査は、規模の確認や墳丘形態を確認することを目的としており、50cm間隔の等高線で、等高線の標高については墳頂部の最高位を０mとしたものであった。

豊後大野市では、平成 22 年度より市内に所在する前方後円墳の精緻な測量図の作成（玉川 2012）と、規模確認のための発掘調査を目的としたプロジェクトを実施しており、その一環として、漆生古墳群の各古墳の墳丘規模等を確認するための発掘調査を実施することとなった。そこで、発掘調査に先立ち、あらかじめ４基の古墳について世界測地系の座標を使用し、デジタル機器を用いて測量調査を行った。

調査の内容

測量方法は変化点測量（玉川 2003）で、あらかじめ市教委が準備した計 15 本の基準点（世界測地系）をもとに、必要に応じて補助杭を設定し、測量調査を行った。測量図としては、25cm間隔の等高線である。測量調査期間としては、平成 23 年 11 月 23 日から 25 年 12 月 8 日の実働計 45 日間の現地調査日数を要した。測量範囲については、立地状況の確認や小坂大塚古墳でも問題となった墳丘の視認性の観点(註１)から、広範囲の測量が必要であると考え、墳丘及び周辺地形を合わせ 10,372.0976239㎡の範囲におよんだ。計測点は、総数で 13,972 点であった（第３図）。なお墳丘測量調査には、玉川剛司が調査指導にあたり、芥川太郎、鮎川和樹、有村源喜、井大樹、井樋豪太、栗林沙希、権丈和徳、木場浅憲、﨑谷雄紀、塩見恭平、柴藤美美、高木慎太郎、田中暁、千原和己、豊崎晃史、中原彰久、橋口貴憲、馬場晶平、藤川貴久、松浦由佳、宮田慈、村田仁志、和田旭史ら（同大学院及び学部生）が参加した。

以下、調査の成果について述べていきたい。

大久保１号墳（第４～６図）

南側から２つ目の古墳で、北側の２号墳と南側の３号墳との間に立地する唯一の前方後円墳である。後円部が南側に向けて築造され、墳丘主軸はＳ－ 29°－ Ｗである。

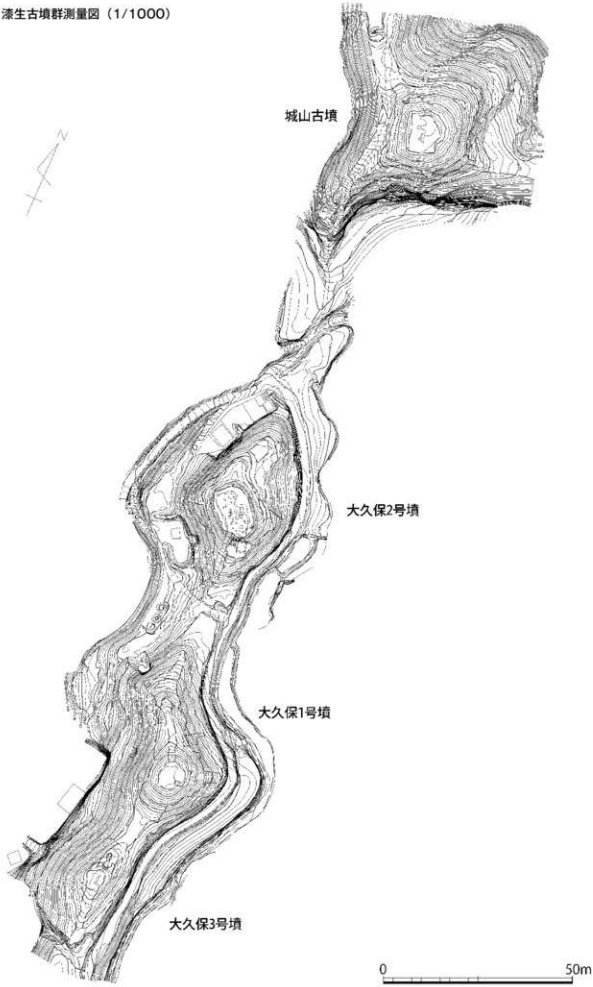
後円部

尾根稜線に接する後円部南側と、後円部北東側の一部については、墳頂部から墳端までの墳丘斜面が良好に遺存しているのがわかった。以下各部の詳細について記載したい。

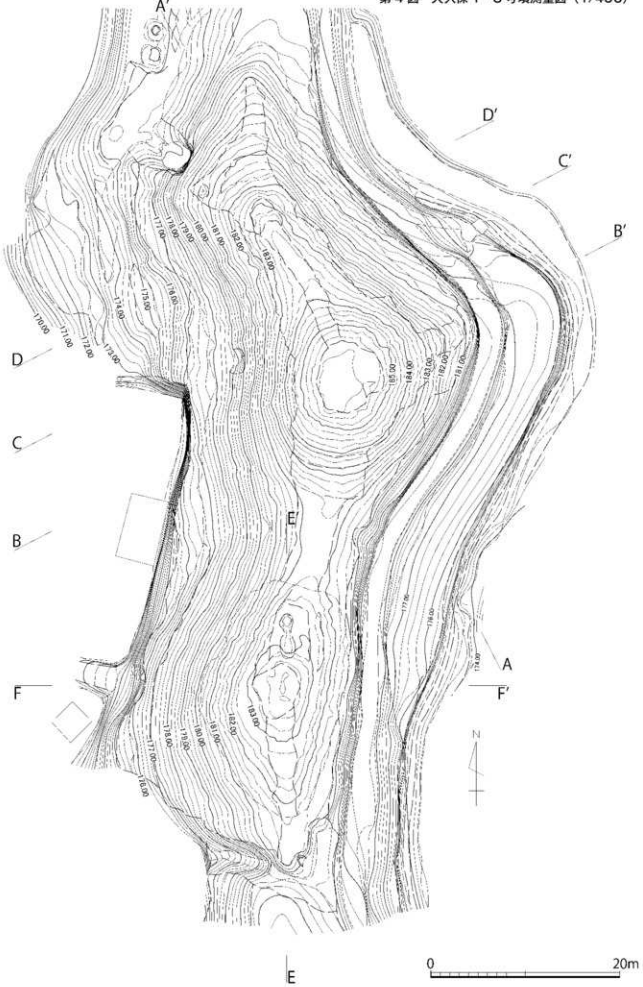
後円部南側の尾根稜線に接する幅約 6.3m の箇所については、標高 182.250m の等高線に平行するように墳端の傾斜変換線（以後、「墳端ライン」と称す。）が遺存していた。また、東側についても標高 181.250m の等高線に沿って幅約 2.2m にかけて墳端ラインが見られる。この２箇所を結ぶ径 25.7m が後円部径であると考えられる。後円部西側については、南側の尾根稜線西端から墳頂部付近を通り、くびれ部にかけて崩落ラインが見られる。その下位の墳丘傾斜面については急傾斜となっており、明確な墳端ラインは認められない。後円部東側については、南側から北東にかけて里道造成に伴う掘削により墳丘が崩落しており、墳端ラインは確認できなかった。また、東側で確認した墳端ラインよりくびれ部にかけても後世の改変によって、墳端ラインが確認できなかった。

段築については、墳丘斜面が良好に遺存している南側斜面の標高 183.750m ～ 183.000m の等高線に沿っ

第３図　漆生古墳群測量図（1/1000）



第４図　大久保１・３号墳測量図（1/400）



てテラス面がみられる。また、同じく東側についても同標高の等高線に沿って確認できることから、2段築盛であると考えられる。墳頂部については、平坦で等高線も乱れていない。最高標高は185.870mで、南側の墳端からの後円部高は3.6mを測る。

くびれ部

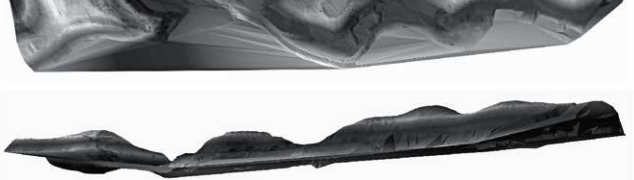
墳丘東側ついては、後円部から続く崩落ラインが前方部まで延びており、明確な墳端は確認できない。また、西側についても同様で、後円部から続く崩落ラインが前方部まで続き、明確な墳端が認められなかった。しかし、両側の等高線を見ると、前方部から直線的に続くラインが後円部に向かって大きく屈曲している。これらの横断面C－C′が接する箇所である、西側の標高181.000mの等高線と東側180.750mの等高線を結ぶ15.5mがくびれ幅になると考えられる。

前方部

墳丘東側及び西側については、くびれ部から続く崩壊ラインが隅角まで延びているため、前方部幅については不明である。また、前端部付近については、後世の削平や風倒木痕等により、墳端としての明確なラインはみられなかった。しかし、181.000mの等高線と平行に墳端と考えられる傾斜変換線がみられ、このラインを墳端ラインとすると、17mが前方部長となる可能性が考えられる。段築については、前端部の墳端ラインよりも上位に、テラス状の平坦面が見られることから、2段築盛の可能性がある。前方部墳頂部については、最高標高183.97mで等高線の乱れもなく、くびれ部から前方部端部方向にかけてほぼ平坦であることが特徴である。また、前方部高については、前端部の墳端から測ると2.6m、後円部墳端から測ると1.4mである。

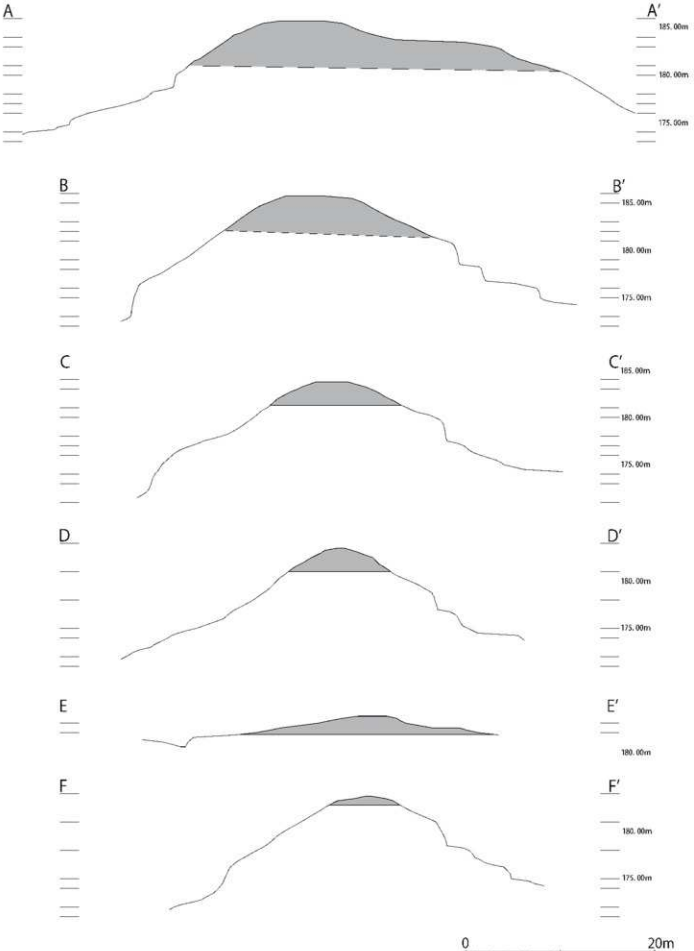
まとめ

これまでの各部についてまとめると、後円部、前方部ともに2段築盛で、後円部径25.7m、後円部高3.6m、くびれ幅15.5m、前方部長17m、前方部高2.6mまたは1.4m、後円部径と前方部長から全長38.9mを測る規模であることが分かった。しかしこれらの規模は、くびれ幅や前端部については明確ではなく、前方部幅についても不明であるため、今後発掘調査による確認が必要である。後円部の平面形態については、等高線から判断すると築造当初から正円形を保っていない可能性がある。つまり、田中氏が指摘するように、狭い尾根線上に築造しているため、正円形に築造できなかった可能性が高い（田中1993）。ただし、越生地区の谷からみると、墳丘の段築や周辺の地形等により整然と築造された前方後円墳の側面観であると認知できる（第5図）。つまり、平面観よりも側面観を意識した築造になっているものと考えられる。また今回の測量調査



第５図　漆生古墳群鳥瞰図（上：真上より、下：南西の谷から）

第６図　大久保１・３号墳縦横断面図（1/400）



では、墳丘や墳丘の周辺から葺石や表採遺物は確認できなかった。

大久保２号墳（第７図）

１号墳より 40m ほど北側に位置し、標高 182.000m の位置に築造されている古墳である。墳丘周辺では、西側に墓地造成のため方形区画、北側にも現代の墓地造成区画により、東側についても１号側に延びる里道により尾根が大きく掘削されている。墳頂部は、近世の墓地造成にともなう削平により、最大長 13.8m、幅 8.9m の平坦面が形成されている。この墳頂部西側の一角に長さ約 2m、幅約 70cm の阿蘇凝結凝灰岩製の舟形石棺の蓋が存在する。また、墳頂部の上端ラインに沿っては、削平した際に出た墳丘土を畔状に寄せた高まりが見られる。墳頂部の最高標高は、182.70m である。墳形としては、墓地造成の削平により北西から南東方向に延びる楕円形を呈している。現状の墳端ラインは、墳丘の北西から東側にかけて、標高 181.500m の等高線に平行して確認できることから、北西から南東方向の最大長 18m、南西から北東方向の長さ 13.3m の規模である。また、南側からの登り口となっている里道の東側には、納骨堂設置の際に削平されたテラス面が存在する。このテラス面は墳丘東側から延びる墳端ラインと接合することから、本来墳端があった箇所を利用し造成されたものと考えられる。ただし、これまで指摘してきた墳端ラインは、墳頂部を削平した際に押し出した墳丘盛土が再堆積したものも含まれると考えられるため、本来の形状については不明である。墳丘北側では、墳端ラインに接する舌状の高まりが確認できる。この高まりが、本墳丘に伴わない場合は、築造時の尾根稜線となると思われる。しかし、墳丘に伴う場合は、等高線が大きく区曲していることから造出もしくは前方部である可能性が考えられる。今後の発掘調査による検証が必要であろう。

大久保３号墳（第４･６図）

大久保１号墳の 15m 程南側に、南北に延びる尾根の軸線上に築造されている古墳である。墳頂部より北側は、長さ 4.6m、幅 1.4m の炭窯により掘削されている。また、東側についても里道による削平で墳丘盛土が一部崩落している。墳形については、旧地形の尾根が狭くなっているため、楕円形を呈している。墳頂部については若干の等高線の乱れがあるものの盗掘等の痕跡は見られない。

現状の墳端については、北側は墳頂部上端ライン北側より 8.5m、南側は墳頂部の上端ライン南側から 10.5m 外側に下端のラインがそれぞれ見られるが、北側については炭窯により大きく改変を受けているため、墳端になる可能性は低いと判断される。その根拠は、南北の下端ラインを結ぶと 25m が最大径となるが、中心が墳頂部の北側上端ライン付近となること。また、南側の下端ラインについても幅 1.7m と狭く、墳端である可能性は低いことからもうかがえる。この南側の墳端ラインよりも 6.8m ほど北側に、下端の傾斜変換線が見られる。この下端ラインから、墳頂部の中心を通る径 14.4m が墳長であると考えられる。

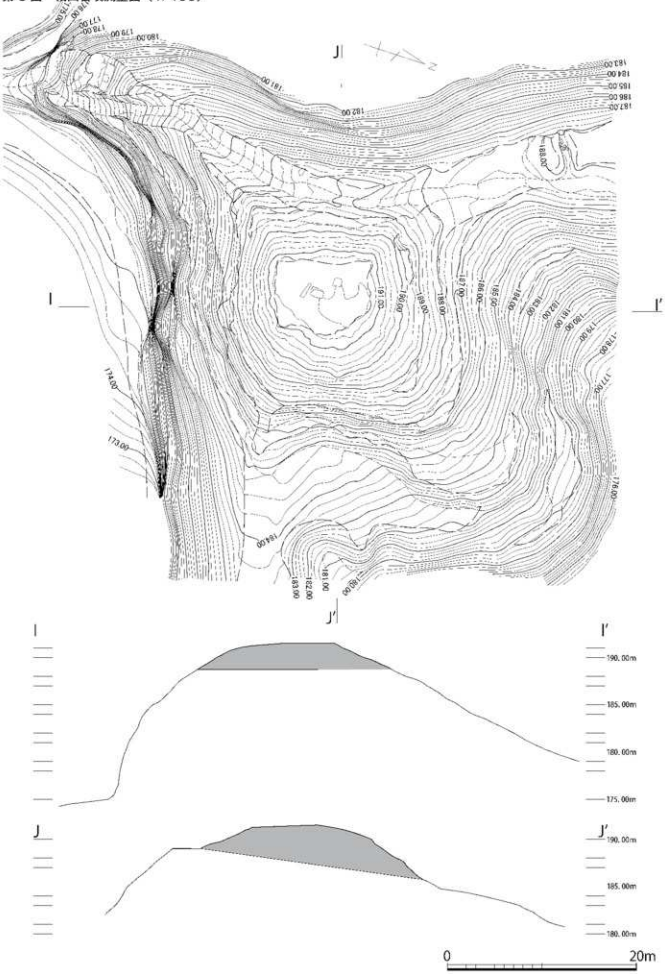
城山古墳（第８図）

古墳群の最北端に立地する古墳で、南北に延びる尾根と東に延びる尾根との分岐点に築造されている。また、丘南側の尾根斜面には阿蘇凝結凝灰岩が露頭しており、城山横穴墓群が造営されている。

墳形については、当初円墳であると考えていたが測量調査の結果（第８図）、隅角が見られることや、隅角間の等高線が直線的にめぐることから、方墳であることがわかった。墳丘の主軸は、N － 17° － W である。墳丘斜面及び墳端については、墳丘斜面西側では里道により墳丘が削平され、北側斜面の西側は風倒木により墳丘盛土が崩落していることにより墳端ラインは認められなかった。また、東側斜面の南側の墳端は、幅約 15m にわたり後世の掘削を受け、盛土が崩落している。南側斜面では、東側尾根に抜ける里道により墳端及び盛土が崩落しているのが確認された。しかし、墳丘斜面北側の東半分から隅角までは、墳丘斜面及び

第７図　大久保２号墳縦横断面図（1/400）

第８図　城山古墳測量図（1/400）



墳端ラインが若干隅丸になっているものの認められ、南側についても里道や後世の掘削により墳丘が崩落しているが一部墳端ラインが確認できる。墳丘東側の南側隅角についても、里道により掘削を受けているが一部墳端ラインが認められる。これら3か所の隅角や墳端ラインより復元すると、南北22.4m、東西25.4mの方墳になると考えられる。段築については、西側墳丘斜面の標高189.000～189.750mの等高線に沿って、幅1.2mほどのテラス面が、北東側の隅角でも標高188.500～189.000mの等高線に沿ってテラス面が確認できることから、2段築盛であった可能性が高い。墳頂部には安山岩製の組み合わせ式石棺の石材が散乱しており、改変を受けている。墳頂部の最高標高は191.700mで、現状の墳丘高は3.5mである。

註1） 古墳の中には、生活・生産空間とかけ離れたところに築造され、その地域の拠点としてのランドマーク的な要素を持つ古墳が存在する。小坂大塚古墳は、七ツ森古墳群や小熊山古墳とともにその一つであると考え論じた。

【参考文献】

神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡部幹雄　1993　「緒方町越生にある漆生古墳群の観察 - 大久保2号石棺の実測と大久保1号墳の測量から -」『おおいた考古』第6集　大分県考古学会

田中裕介　1998　「大分県の大型古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書　第100輯　大分県教育委員会

下村智・吉田和彦・玉川剛司　2003　「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」『九州考古学第』78号　九州考古学会

玉川剛司　2004　「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2　別府大学文化財研究所

玉川剛司　2012　「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報3 - 平成22年度調査 - 』豊後大野市教育委員会

3　漆生古墳群第１次発掘調査

別府大学　田中裕介

1）はじめに

豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって第１次の発掘調査を行った。

現地調査は諸岡郁（豊後大野市教委）、田中裕介（別府大学文学部教授）を主担当者に、上野淳也（別府大学文学部助教）、玉川剛司（別府大学職員）が副担当にあたり、2012（平成24）年12月18日から城山古墳と大久保１号墳のトレンチ調査を諸岡担当によって先行実施し、12月21日～23日、26～28日には別府大学の遺跡調査実習（集中講義）の学生が参加し、翌2013（平成25）年１月４～６日と13･14日に補足調査を行い、今年度の調査を終了した。参加者は以下の通り。

作業員　高山憲章、高山幸治、首藤満生、羽田野健夫、高山　尉

学　生　権丈和徳（M１）、崎谷裕紀（M１）、宮田滋（院研究生）、柴藤芙美、山本圭祐（以上学部４年）松浦由佳、千原和己、川上友茉、倉崎壮志、崎野祐太郎、島圭史、杉本直之、武田典子、森脇大道、山本真央、幸義人、曹承喜、大谷亨、菊池真央子、久保千明、久保山真理早、田中弥来、橋崎泰志（以上学部３年）、木場浅葱、藤川貴久（以上学部２年）、鮎川和樹、村田仁志（以上学部１年）、山口将史（OB）

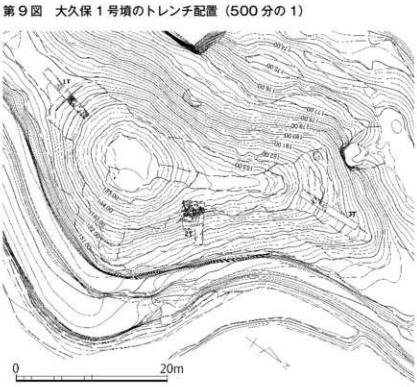
また発掘中には、杉井健（熊本大学文学部教授）、高橋克壽（花園大学文学部教授）下村智（別府大学文学部教授）、吉田和彦（杵築市教委）各氏の助言を現地で得たほか、赤色顔料の同定を平尾良光（別府大学文学部教授）氏に行っていただいた。図面整理とデジタルトレースには権丈、崎谷、佐藤理恵･北原美稀（2013年度M１）の協力を得た。各古墳の平面図、トレンチ配置の調整は玉川が行った。

基本層序　古墳群の造られた丘陵は阿蘇４溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。基盤層はこの凝灰岩層がかなり風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第１層、その下の自然堆積層を第２層、盛土等の人為堆積層を第３層、基盤の凝灰岩層を第４層として、その層序の間に形成される人為的な面をアルファベットで記載した。

2）大久保１号墳（第9図　写真図版１）

1992年の測量時に墳長34mの前方後円墳と報告され、特に前方部が低い形状から古墳時代前期にさかのぼる可能性が指摘されていた(註1)。今回の調査の目的は、墳丘及び周溝などの存在と規模および古墳の範囲確定の資料を得るという保存目的と、あわせて墳輪あるいは土師器等の有無を確認し古墳の築造年代を確定する資料を得る研究目的でおこなった。なお今年度の再測量調査によって調査前に前方部の前端線が、1992年の測量時の見解よりさらに北側に2mほどのび、墳丘規模がやや大きくなるのではないかという意見が出された（前節玉川報告参照）。

第９図　大久保１号墳のトレンチ配置（500分の１）

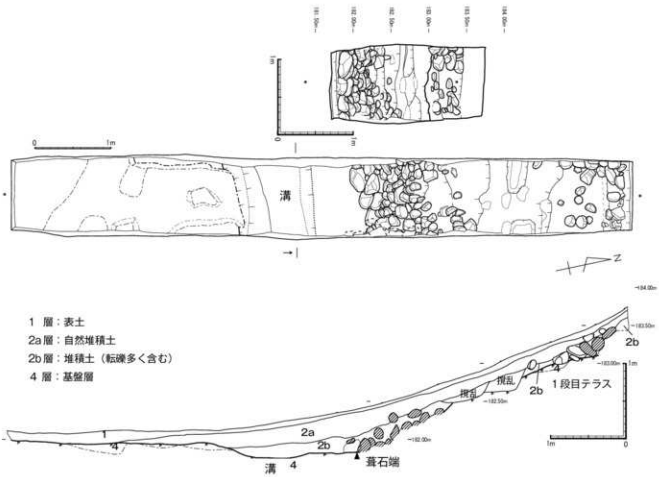


そこで第１トレンチは後円部の墳端確認と第１段斜面の構築状況および、丘陵から古墳を区画する施設等の確認を目的として１号墳南側に設定し、第２トレンチは墳丘くびれ部の位置を確認して墳形復元の資料をえることで前方後円墳であることを実証し、あわせて供献土器の出土を期待した。第３トレンチは前方部の前端の状況を確認して古墳の規模を確定することを目的に設定した。

第１トレンチ（第10図　写真図版１）　後円部の墳端を見つけるために後円部墳丘斜面下部から丘陵尾根に向かって幅１m×8.2 mの調査区を設定した。表土１層を剥ぐとすぐに自然堆積土2a層から人頭大～拳大の円礫が多量に混じり始め、葺石が用いられていることが確認された。この層を取り除くと移動流出した葺石を多量に含む黒褐色土2b層が墳丘斜面に現れ、その外側では基盤層４層が露出した。その時点で丘陵側を精査すると、丘陵を断ち切るように2b層の堆積がひろがり、墳丘と自然の尾根を区画する溝と考えられた。

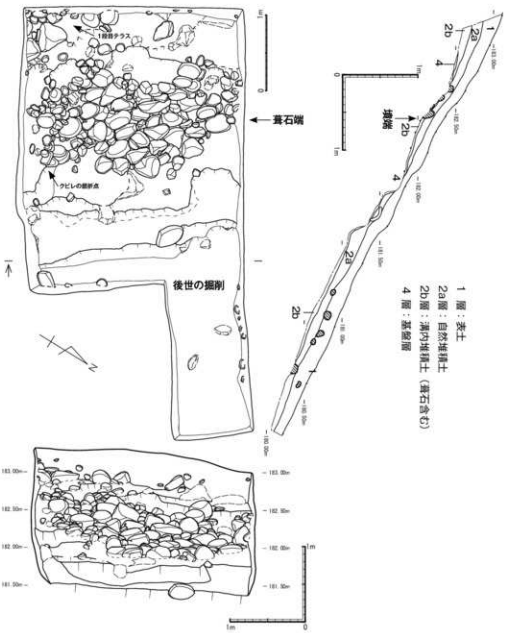
溝内堆積土2b層を葺石の移動を確認しながら慎重に除去して掘下げると、幅２m弱、深さ20cmほどの溝が現れ、その溝の下端181.80 m付近からから築造時の葺石が高さ１m程度現れた。墳端の基底石は人頭大の円礫を用い、葺き上げるにつれて円礫は小型化していた。標高182.4 m付近から上は凝灰岩の基盤層４層が露出し、183.0 m付近から上には再び堆積土2b層と葺石の堆積が現れた。上部の堆積を取り除くと幅１mほどの平坦面が現れ、第１段目上のテラスと考えられたが、２段目の葺石基底部までは達しなかった。2b層からは土師器破片が少量出土したが、いずれも上位から転落したものである。前方部南側の１段目は基盤層４層を削り出して墳丘と周溝を構築し、その斜面に葺石をおこなっている状況が判明した。葺石はすべて角のとれた円礫で、墳丘の基盤層４層からは産出せず、大野川あるいは緒方川などの周辺河川敷から採集されたと推定される。第２・３トレンチの葺石も同種であった。（実測図作成：田中、崎谷、宮田、木場）

第10図　大久保１号墳　第１トレンチ（50分の１）



第２トレンチ（第 11 図　写真図版１）　測量図から判断してくびれ部にあたる位置に幅３m×長さ 3.7 m の調査区を設定し、のちほど下方に幅１m長さ２m拡張した。表土１層を剥ぐと全体に円礫が大量に出土し、崩落した葺石が堆積していることが明瞭であった。転礫を含む土層を除去していくと上位の 182.70 m付近から平坦面を検出し前方部に向かって低く傾斜していた、人頭大の円礫が堆積していたが、動いており、そこが第１段目上のテラスと推定された。その下の第１段目の斜面は前方部側には人頭大の葺石が数段重ねられ、181.80 m あたりに墳端が来るものと推定される。下端の葺石は傾斜がゆるく、一見テラスのように見えるが、二次的な堆積の可能性もある。いっぽう調査区南側では礫が小ぶりとなり、基盤層の斜面が露出した。１段目葺石の基底ラインと基盤層のラインを追うと異なる大きさの葺石の境界が後円部と前方部の境界となると推定された。この葺石基底が墳端であるかどうかを確かめるためにさらに調査区を下部に延長したが、後世に掘削されたらしく、急に崖上に下がって基盤層４層が露出した。葺石上面からところどころ土師器の小片が出土したが、いずれも上位から流れ落ちたものであった。墳丘東側のくびれ部の１段目は基盤層４層を削り出して構築し、斜面に葺石をおこなっている状況が判明した。（実測図作成：諸岡）

第11図　大久保１号墳　第２トレンチ（50 分の１）



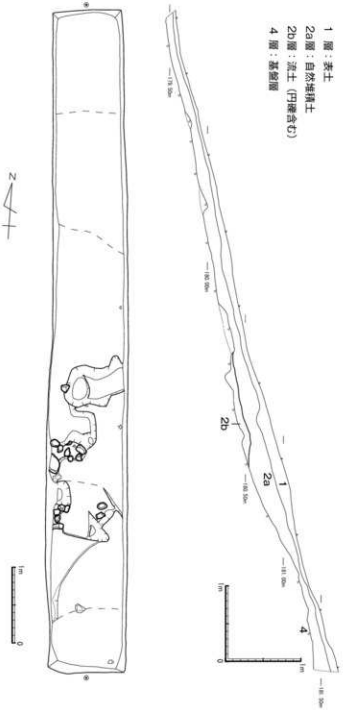
第３トレンチ（第12図　写真図版１）

幅1m×長さ8.8mの調査区を尾根線に平行して、前方部の前端推定位置からさらに外側に長く設定した。これはまず墳丘および周辺施設の範囲確認を第１の目的にしたことによる。

表土１層をはぐと、自然堆積層2a層の墳丘側の調査区上端から２ないし４ｍに当たる範囲から、円礫が多数顔をだした。いずれも拳大からやや大きめの河原石で、基盤層の中に本来包含されているものではなく、丘陵下の大野川河川敷などで採集されるものであることから、人為的に持ち込まれた葺石の一部であると推定された。その範囲の上位と下位では円礫の出土は極めて少なく、2a層を10cmほど掘り下げるとすぐに基盤層４層が露出した。

円礫出土範囲を丁寧に掘り下げると黒褐色の流下堆積土2b層が広がり、斜面が段上の削り出しになることが判明したが、円礫の下には葺石構築時の根石等は発見されず、いずれの円礫も二次的な堆積であると推定された。段状の遺構は整っておらず葺石の根石も残っていないので墳端とは断定できなかったが、再測量調査による墳端推定ラインと一致し、トレンチ内にはほかに基盤を削り込んだ痕跡はなかったので、墳端である可能性を考えたうえで次回の調査への課題として残された。なお円礫堆積に混じって数点の土師器小片が出土したが、いずれも流れ落ちたものである。（実測図作成：崎谷）

第12図　大久保１号墳　第３トレンチ（50分の１）



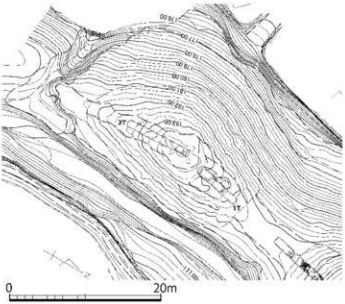
調査成果　1992年測量時の前方部を北に向けた自然丘陵を利用して、葺石をもつ墳長34ないし36ｍ前方後円墳という成果に、追加修正して成果を列挙する。①南側の後円部端は幅２ｍほどの溝で丘陵と区画されている。②後円部からくびれ部さらに前方部の１段目は基盤層である凝灰岩の岩盤を削り出して整形している。③後円部の墳端の高さは後円部南端と東くびれ部で181.80ｍ、第１段目上のテラス面が183.00ｍとなり後円部については墳端と１段目テラスの高さを揃えている。④再測量によって墳長は約39mと推定されたが、後円部側では、推定より内側の位置に墳端を確認した。これに対し前方部前端の墳端は基底部の葺石を発見できなかったため確定できなかった。したがって墳長数値の確定も未解決のままとなった。⑤くびれ部では葺石に利用された円礫の大きさが異なる範囲があり、施行単位が区別できる可能性がある。⑥出土遺物がきわめて少なく時期を特定する資料は得られなかった。

3）大久保３号墳（第13図　写真図版２）

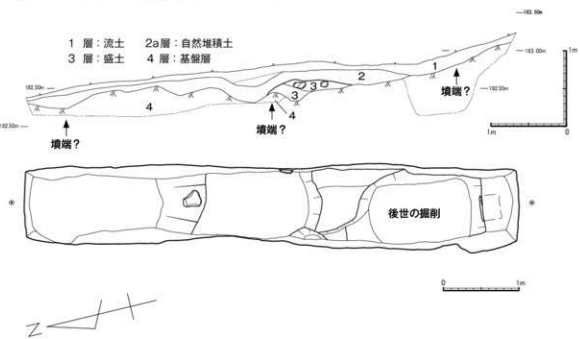
1992年の調査時に古墳が存在する可能性のある地形であることが指摘され、今年度の測量では円墳状の高まりとなることが分かったが、葺石もなく形状も明瞭ではないので、まず第１に古墳であるかどうかを確かめるために、丘陵の方向に平行して２本の調査区を設定した。

第１トレンチ（第14図　写真図版２）　幅１ｍ×長さ6.5ｍの調査区を丘陵に平行して古墳推定範囲の北部に設定した。高まりの北側に大きな穴が掘られており、その場所を清掃して、削り出しと盛土の有無を断面層序を中心に検討した。現代の遺構に大きく破壊されていたが、全体に円礫の出土はなく、葺石は存在しないものと推定され、このトレンチには古墳に関連する遺構は存在せず、わずかに断面土層に基盤層（4層）に傾斜変換点が３か所観察されたのでそのどれかが墳端になると推定された。（実測図作成：千原）

第13図　大久保３号墳のトレンチ配置（500分の１）



第14図　大久保３号墳　第１トレンチ（50分の１）



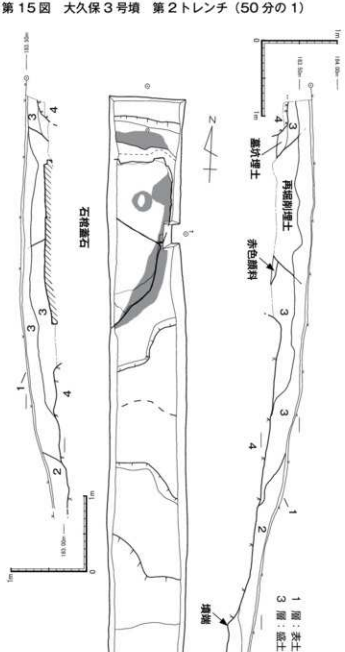
第２トレンチ（第15図　写真図版２）　第１トレンチの調査で古墳であるという確証が得られなかったため、ダメ押しのために中心部にまで及ぶ幅１ｍ×長さ９ｍの調査区を設定した。その結果調査区北端で石棺の棺蓋を発見し、大久保３号墳が古墳であることが一転判明した。調査は蓋石の露出にとどめたが、棺蓋の石材は大きく２枚に分かれた安山岩の石材を利用し、北側の石材には不整ながら２カ所に縄掛状の突起を削り出している。また断面土層を検討すると、当初の墓壙とは別に、北側の棺蓋に向かって再度掘り込まれた面を観察できたので、追葬などにより石棺を開封したことが判明した。蓋石が２枚に分かれていることと突起があることは、追葬等による開棺があらかじめ予定されていたことを推測させる。また初葬時には棺蓋の周囲に赤色顔料が目地をふさぐように塗布されていることが観察でき、北棺蓋中央には赤色顔料が円文風に塗布されていた。再閉塞の際には赤色顔料の塗布は行われていない。なお赤色顔料の成分はベンガラであ

る。（平尾良光氏分析）

墳丘においては削り出しによる墳端と盛土を確認した。削り出し部分やその周囲には円礫の出土は全くなく、葺石が行われていないことも判明した。あわせて現状で30cm程度の盛土が残っていることが判明した。（実測図作成：権丈、玉川）

調査成果　調査をまとめると①まず古墳であることが主体部の発見で実証された。②削り出しによる墳端の造成と、盛土による墳丘構築が行われているが、葺石は使用されていない。③石棺棺蓋の中央を古墳の中心と仮定すると南側墳端までほぼ5mであるので、南北の長さは折返し10m程度の古墳となる。第1トレンチにおける3ヶ所の北側墳端の推定値のうち、最も内側の推定地点が折返し5mの位置にあたる。測量調査ではさらに外側の傾斜変換点を墳端と推定して径14.4mとしたが、削出造成による墳端を発掘で確認できたので、実際は南北径10mほどになる可能性が高い。④墳形は東西が尾根の斜面となって流出しているので判然としないが、測量図から推測して円墳の可能性が高い。⑤石棺の棺身は組み合わせ式になる可能性が高いが、棺蓋に突起がある点などから刳貫き式の可能性も否定できない。⑥主体部は基盤層4層を深く掘削し、棺蓋の高さを基盤層の高さに合わせており、初葬後に盛土をおこなって墳丘を完成させたと推定される。また主体部は南北方向の尾根地形に平行して設定されている。⑦初葬時には棺蓋の周囲にベンガラの塗布が行われている。⑧追葬等のためそのご北棺蓋をあける開棺が行われている。棺蓋の形状から見て当初から想定された行為と推定される。なお土器等の遺物は出土していない。

第15図　大久保3号墳　第2トレンチ（50分の1）



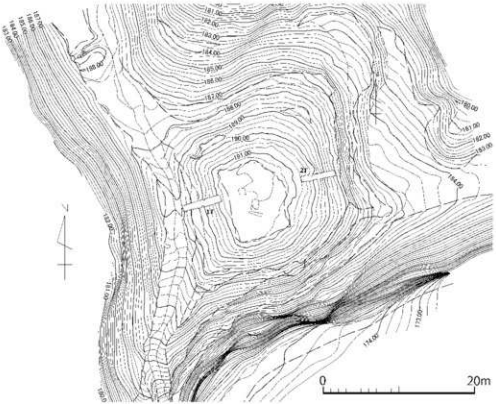
4）城山古墳（第16図　写真図版2）

2012年度の測量調査の結果、一辺22.4m×25.4mの方墳である可能性が高くなり、古墳の範囲を確認するため東西に2カ所のトレンチを設定した。丘陵の西側に広がる広い谷からみると方墳のよく見える正面は西側になり、そちらに向かう西北と西南のコーナーは測量図では明瞭な隈角をなすが、反対側の2つのコーナーは不明瞭である。

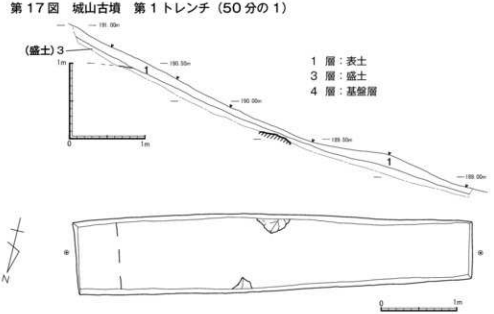
第１トレンチ（第17図　写真図版２）方墳の１辺が最もよく残っている西側斜面に幅1m×長さ5.2mの調査区を設定した。表土１層を剥ぐとすぐに凝灰岩の基盤層４層が露出した。ところどころ硬い凝灰岩の岩盤が顔を出す。トレンチの上位標高190.50mあたりから上では軟質で茶褐色土３層が堆積し、基盤層４層が認められなかったので、その高さから上には盛土が施されているものと推定される。それより下は葺石もなく基盤層を削り出して墳丘斜面を形成していると推定される。また段築の存在する気配はなかった。(実測図作成：諸岡)

第２トレンチ（第18図　写真図版２）　測量図による限り方墳の形状が最も不安定な東側の斜面に幅1m×長さ4.6mの調査区を設定した。途中倒木による攪乱があり層位が不明瞭なところもあるが、第１トレンチと同じく意外にもすぐに基盤層４層があらわれ、標高190.0mあたりから上で盛土３層が認められた。正面の西側よりも東側の方が厚く盛土が行われている。厚いためであろうか190m付近から傾斜がゆるくなっているのは、流出が激しかったためと推測される。段築は判明しなかった。第１トレンチと同じく葺石や出土遺物は一点も見当たらなかった。(実測図作成：諸岡)

第16図　城山古墳のトレンチ配置（500分の１）

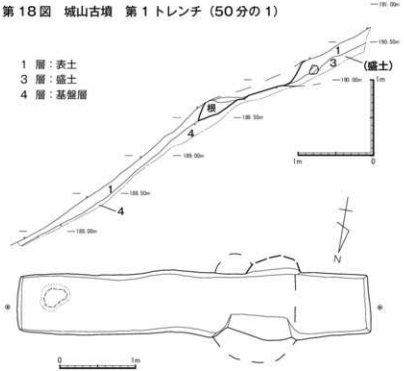


第17図　城山古墳　第１トレンチ（50分の１）



調査成果　方墳であるとの測量調査の結果を受けて臨んだ発掘調査の成果は、以下の通り。①墳丘は削出しで整形されている。盛土は墳頂部に西に薄く東に厚く盛られている。②測量調査では、二段築成の可能性が指摘されたが、両トレンチとも確認できないので段築や葺石はないようである。③出土遺物はなく、年代を推定する資料は得られなかった。またトレンチを測量による墳端推定ラインまで延伸できなかったため、墳端を確認できず、したがって規模の数値を確定できなかった。今後の課題である。

第18図　城山古墳　第1トレンチ（50分の1）



5）まとめ

2012年度の第1次調査の成果をまとめると、以前から判明していた大久保1号墳・大久保2号墳・城山古墳に加えて、大久保3号墳が古墳であることが確定し、漆生古墳群は現状では4基からなることが判明した。

さらに大久保1号墳が前方後円墳であることが発掘により確証され、少なくとも2段以上の段築を有する古墳であることと、後円部には溝を掘削して区画していることが判明した。葺石は拳大から人頭大の円礫がもちいられ、この丘陵が凝灰岩からなる丘であることから大野川流域から採集されたものと容易に推測される。惜しむらくは前方部前端においては、後円部やくびれ部のような墳端列石が発見できなかったので、墳端ラインの確定ができず、墳長の数値を決定できなかった。その後2013年度の2次調査では第3トレンチと同じ位置からより良好な葺石と削り出しを発見し、墳端が確定していることを申し添えて、来年度の報告で責をはたしたい。

2012年度は大久保2号墳の調査を行わなかったが、2013年度の2次調査と測量の結果を先取りすれば、葺石を伴わない削り出しによる方墳あるいは円墳であることが判明している。

大久保3号墳では中心主体となる安山岩製の石棺の蓋石が発見され、周囲にはベンガラの塗布が行われ、再度蓋石をあけた追葬らしき痕跡も判明した。葺石はなかったが墳端の削平面をみとめ、径10mほどの円墳であることが明らかになった。

城山古墳も葺石のない削りだし一部盛り土によって築造された一辺20mをこえる方墳であることも判明した。

第1次調査の結果、以上のように古墳群は4基からなり前方後円墳、方墳、円墳と墳形にバラエティーに富むことがわかり、葺石の有る古墳無い古墳の違いがあることもわかったが、トレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみである。したがって各古墳の築造順序や時期は依然として明確ではない。

（註1）　神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡郁・渡部幹雄 1993「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古』6 大分県考古学会

遠　景

大久保１号墳第１トレンチ

大久保１号墳第２トレンチ

大久保１号墳第３トレンチ

大久保３号墳第１トレンチ

大久保３号墳第２トレンチ

大久保３号墳第２トレンチ

大久保２号墳石棺

城山古墳石棺

城山古墳第１トレンチ

城山古墳第２トレンチ

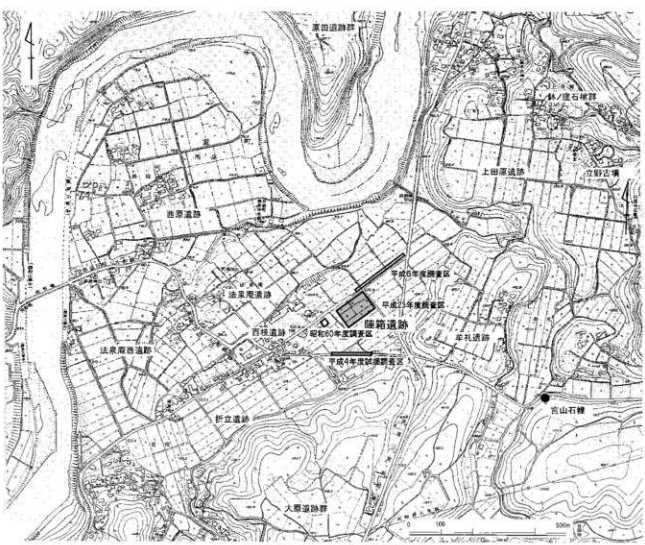
Ⅲ　陣箱遺跡

調査の概要

三重町北部の大野川河岸段丘上に所在する。昭和60年度および平成6年度に弥生後期を中心とする竪穴遺構群が調査されているが、その近接地で市営浄水場の建設計画により事前の試掘調査を行なった。調査区の水田および畑地において耕作の関係上、最下段の畑2筆と最上段の畑1筆を対象として、試掘調査トレンチを設定して重機による表土剥ぎを開始した。トレンチは幅2m、深さは約60cm～1mで、3箇所計340㎡を掘下げた。

トレンチ3箇所とも竪穴住居跡とみられる遺構を少なくとも16基検出し、ほかに柱穴なども多数確認できた。遺物は弥生時代中期から後期にかけての土器・石器が出土しており、過去の調査例と同様の遺構群と考えられる。調査区全域で圃場整備開発の行われているものの、地表より遺構検出面まで深いため影響は少なく、良好に保存されている。遺構検出状況から、調査対象区全面にわたって遺構が分布している可能性が高いと判断された。開発側との協議により、建設工事は平成24年度に延期して23年度中に本調査による記録保存を行うこととなった。

本調査については、開発敷地11,000㎡のうち、浄水場施設が建築される区域約5200㎡を対象としたため、試掘のトレンチ2本は調査区外となった。耕作の関係上、10月25日に水田部分、11月1日に残りの畑地部分の2回に分けて表土剥ぎを開始した。遺構は弥生中期から古墳時代初頭の竪穴遺構が43基のほか、掘立柱建物や周溝墓、中世の溝状遺構などを検出した。竪穴遺構の多くは住居跡と考えられ、長方形や台形など



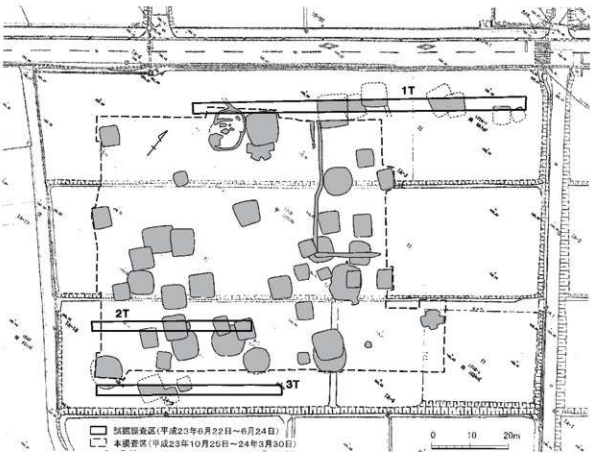
第19図　陣箱遺跡周辺地形図

も含む方形が多く、他に円形や花弁形などもある。周溝墓は古墳時代前期と考えられ、やや楕円形の溝に区画された墓壙が8基程見られ、うち2基には木棺墓の可能性がある。遺物は土器・石器・鉄器など大野川流域で共通したものである。

調査は平成24年3月30日に終了し、現在報告書作成のため整理中である。

参考文献 「陣箱遺跡」1987　三重町教育委員会

「陣箱遺跡C地区」 1996　三重町教育委員会



第20図　陣箱遺跡調査位置図

陣箱遺跡調査写真

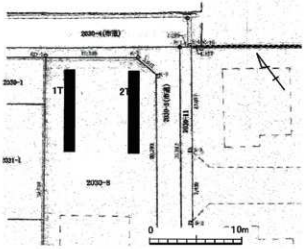
Ⅳ　桜馬場遺跡

調査の概要

三重町中心部の通称市原と呼ばれる台地上に所在する。本遺跡では平成５年および平成７年に試掘調査が行われているが、いずれも遺構・遺物は見つかっていない。宅地造成用地として開発側より文化財調査依頼に基づき確認調査を行った。調査は建物や水道管を避けるため204㎡の空地に試掘調査トレンチを２箇所設定し、重機による表土剥ぎを開始した。トレンチは幅1.2m、深さは約1mで、計20㎡を掘下げた。

トレンチ２箇所とも遺構・遺物ともに検出できなかった。第１トレンチではローム層の上面まで掘下げて確認したが、第２トレンチは撹乱による土層の残存は悪く、遺構の有無の確認はできない状態であった。過去の造成によるためか敷地全体に撹乱は及んでいるとみられるため、事前の本調査は必要なしと判断した。

第21図　桜馬場遺跡調査位置図



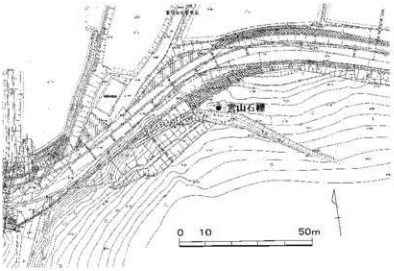
第22図　桜馬場遺跡区配置図

桜馬場遺跡調査写真

V　宮山石幢

調査の概要

陣箱遺跡の東700 m付近の楠田原と呼ばれる台地斜面に所在する。宮山石幢は現在市指定有形文化財となっており、その周囲にいくつかの近世石造物が安置されている。市道浅水牟礼線改良に伴う法面擁壁工事により石造物の移設が計画されたため、事前に踏査を行った。現況は道路状の窪地で周囲は土塁状の地形が確認でき、中世石塔である宮山石幢をはじめとする信仰の関連の遺跡の存在が予想されるものであった。

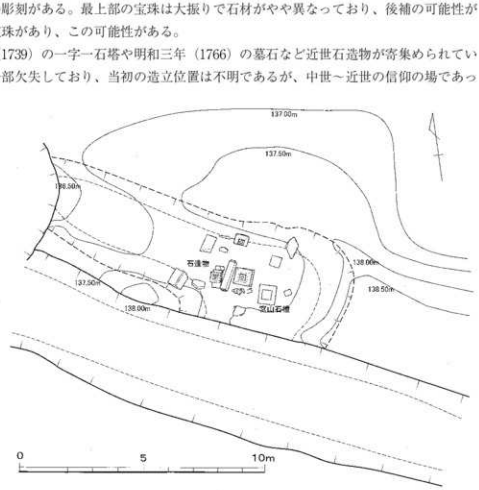


第23図　宮山石幢調査位置図

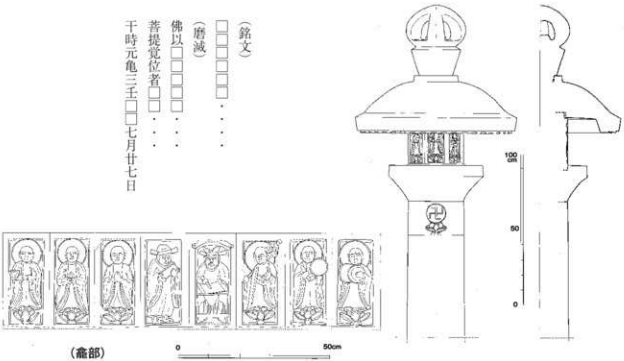
宮山石幢は下から幢身・中台・龕部・笠・宝珠となっている。基礎はコンクリートで覆われており、本来の基礎は確認できない。幢身の北面に「卍」文と連弁が彫り出された下に銘文があり、元亀三年（1572）の紀年銘があるが、それ以外は磨滅でほとんど読み取れない。中台は幢身と同じく方形で、セメント等で龕部を固定されている。龕部は八角形で、八面には六地蔵像と閻魔・十王像が彫り出されている。笠は円形で、内刳りが大きく、二重棰の彫刻がある。最上部の宝珠は大振りで石材がやや異なっており、後補の可能性がある。すぐ脇に欠損した宝珠があり、この可能性がある。

その周囲には元文四年（1739）の一字一石塔や明和三年（1766）の墓石など近世石造物が寄集められている。その多くは倒れたり一部欠失しており、当初の造立位置は不明であるが、中世～近世の信仰の場であったと考えられる。

石造物移設について、宮山石幢に亀裂や剥落がみられるなど保存状態はあまり良くないことが判明した。移設によって損壊の恐れがあるため、宮山石幢は現状のまま保存するように工法変更し、それ以外の近世石造物のみ移設となった。地下遺構の有無について移設や掘削工事に立会ったものの、特に遺構や遺物は確認できなかった。石造物の多くは他所から移転した可能性があるもので、そのため事前の本調査は必要なしと判断した。



第24図　宮山石幢周辺地形図



第 25 図　宮山石幢実測図

宮山石幢調査写真

Ⅵ　高松遺跡

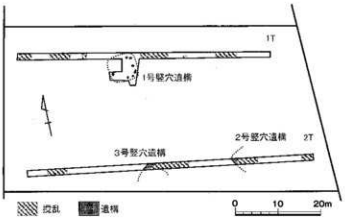
調査の概要

犬飼町南東部の大野川右岸に広がる広大な台地上に所在する。本遺跡では1986年に弥生時代後期の集落遺跡が調査された区域の南側近接地である。天地返し計画のため、調査はトレンチを2本設定し、重機による確認調査を行った。トレンチは幅1.5m、深さは約0.4m程で、計218㎡を掘下げた。

トレンチ2箇所とも表土直下で地山ローム層が現れ、上層の黒色土は過去の基盤整備で除去されていることが判明し、攪乱も至る所で見られた。しかし、まとまった柱穴群を1トレンチで検出し、床面を失った竪穴遺構と思われる。また、2トレンチの攪乱部分の脇に床面の一部とみられる竪穴遺構2箇所を検出し、計3基ほどの竪穴遺構の存在が推定される。弥生時代と思われる土器片もわずかであるが出土したことから、高松遺跡で検出された集落跡が南側も広範囲に広がることを示すものと推定される。

しかし、過去の開発により遺構群はほとんど破壊された状態であることから、事前の本調査は必要なしと判断した。しかし、基盤整備を実施しているにも関わらず遺構の残存することもあることから周辺地域に対する開発についても注意が必要である。

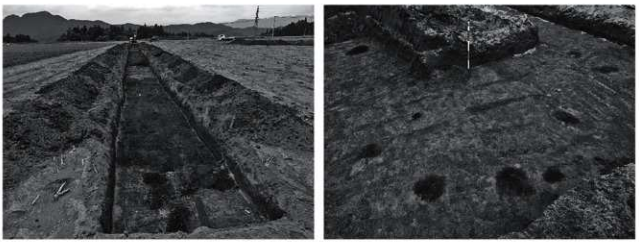
第26図　高松遺跡周辺地形図



第27図　高松遺跡調査位置図

参考文献

「高松遺跡」1988　犬飼町教育委員会



高松遺跡調査写真

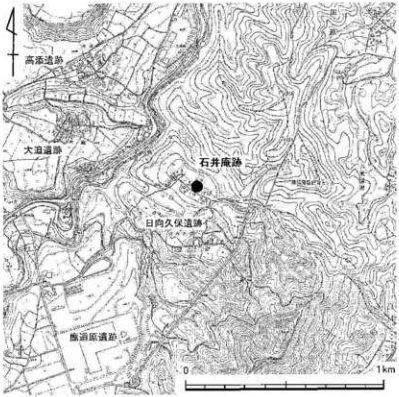
Ⅶ　石井庵跡

調査の概要

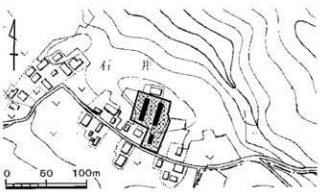
石井庵跡は、犬飼町田原字石井の台地上に所在する。工事予定地の近隣には、寺院跡の伝承があり、石井庵または釈迦堂という地名が存在する。市指定有形文化財の石井宝篋印塔（康暦三年銘）および釈迦堂宝篋印塔の所在が寺院跡の名残を残している。福祉施設建設が計画されたため、事前に試掘調査を実施した。

調査はトレンチを３本設定し、重機による確認調査を行った。トレンチは幅 1.5m、深さ約 0.3m、延長 20m を２本、また幅 1.5m、深さ 0.2m、延長 6m を１本入れた。

トレンチ３箇所とも表土直下で地山ローム層が現れ、上層の茶褐色土は過去に耕作などで撹乱された土層であることが判明した。柱穴等の遺構も一部に確認されたが撹乱が新しく、近年の耕作に関するものと判断される。遺物は皆無で、寺院等に関係する遺構などは検出されなかった。ため、事前の本調査は必要なしと判断した。



第 28 図　石井庵跡周辺地形図



第 29 図　石井庵跡調査位置図

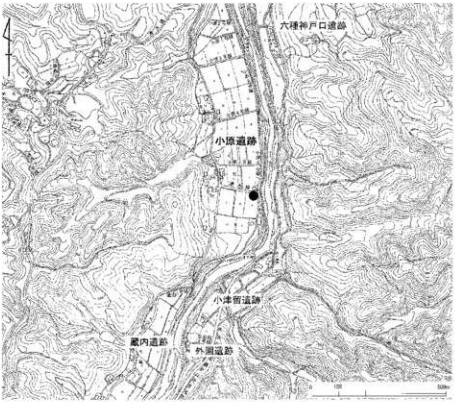
石井庵跡調査写真

Ⅷ　小原遺跡

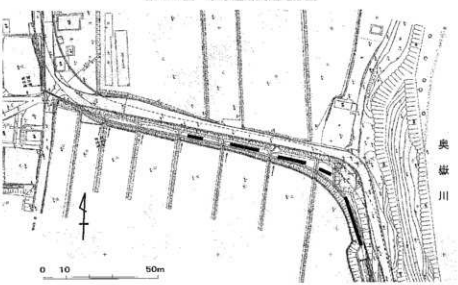
調査の概要

清川町南部の奥嶽川沿いの平坦な段丘地形上で、現況は水田となっている。市道清水線改良工事に伴う道路拡幅予定範囲内にてトレンチを5か所設定し、幅1m、長さ延べ60mを重機による表土剥ぎを行った。

表土より1.5m程の深さでアカホヤ層を検出したが、以前大幅に攪乱を受けている状況であった。さらに0.5m程下層のローム層まで部分的に掘り下げたが、特に遺構・遺物はみられないため、工事着工に問題なしと判断した。



第30図　小原遺跡周辺地形図



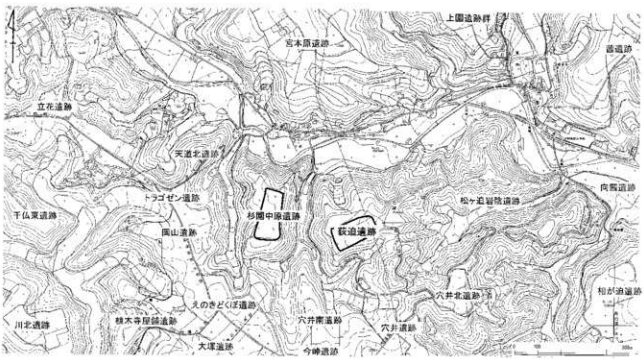
第31図　小原遺跡調査位置図

小原遺跡調査調査写真

Ⅸ　荻迫遺跡・杉園中原遺跡

調査の概要

調査区は大野町中央部の台地上で、過去に弥生時代の竪穴遺構や遺物が出土した穴井遺跡や穴井南遺跡の近接地である。今回の調査は園芸ハウス造成に伴い、遺構・遺物の確認を行った。開発範囲内にトレンチ5箇所を設定し、荻迫遺跡で計550㎡、杉園中原遺跡で700㎡を重機による表土剥ぎを行った。



第32図　荻迫遺跡・杉園中原周辺地形図

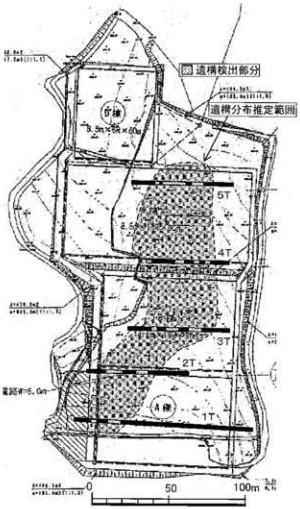
荻迫遺跡では、表土直下でローム層の赤土が現れ、しかも攪乱が多く、過去の圃場整備のためか著しく削平されていることが判明した。第1トレンチ付近では地表面に弥生土器が散布しているものの、調査区全面で遺物包含層は残存していない状態のため、遺構などは全くみられず、工事着工に問題なしと判断した。

杉園中原遺跡では、表土直下でローム層の赤土が現れ、しかも攪乱が多くみられるが、台地中央付近で黒色土の層が残存し弥生土器などの遺物が多数検出でき、竪穴住居などの遺構と推定される。著しく削平されているもののすべてのトレンチで遺構が残存していることが確認できた。穴井遺跡等と同様な弥生時代の集落遺跡と考えられる。

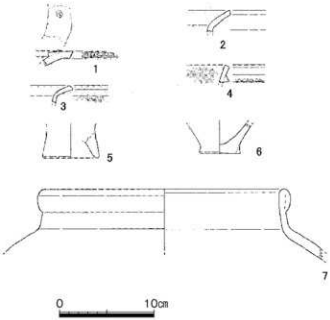
第33図　荻迫遺跡調査位置図

遺物は第19図1は壺口縁部、2~4は甕口縁部で、弥生時代中期末~後期に相当するもので、5・6は壺または甕の底部である。いずれもトレンチ内の表土より出土した。7は16世紀代の備前系陶器甕で付近より採集されている。開発部局と協議の結果、造成工

事は盛土による工法変更を行うことで遺跡の保存を図ることになった。



第 34 図　杉園中原遺跡調査位置図



第 35 図　杉園中原遺跡採集遺物実測図

荻迫遺跡調査写真

杉園中原遺跡調査写真

報　告　書　抄　録

フリガナ	ブンゴオオノシナイイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4
副書名	平成23年度・24年度調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	諸岡　郁・田中裕介・玉川剛司
編集機関	豊後大野市教育委員会
所在地	〒879-7131　大分県豊後大野市三重町市場1200番地
発行年月日	平成26(2014)年3月28日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
漆生古墳群（ウルシオ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）緒方町越生字大久保・城山（オガタマチコシオ オクボ・シロヤマ）	44212	212203	32°58'33"	131°29'26"	2012.12.06 ～2013.02.28	55.4㎡	範囲確認
陣箱遺跡（ジンバコ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）三重町百枝字陣箱（ミエマチモエダ ジンバコ）	44212	212037	33°00'06"	131°34'50"	2011.06.22 ～2011.06.24	340㎡	浄水場建設
桜馬場遺跡（サクラババ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）三重町市場字市原（ミエマチイチバ イチハラ）	44212	212078	32°58'40"	131°34'33"	2011.09.14 ～2011.09.15	20㎡	宅地造成
宮山石幢（ミヤヤマセキドウ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）三重町百枝字宮山（ミエマチモエダ ミヤヤマ）	44212	212040	32°59'55"	131°35'14"	2011.09.22 ～2011.09.22	2㎡	市道改良工事
高松遺跡（タカマツ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）犬飼町大寒字登口（イヌガイマチオキガリ ノボリクチ）	44212	212686	33°02'52"	131°38'43"	2011.10.20 ～2011.10.21	218㎡	農業基盤整備
石井庵跡（イシイアン）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）犬飼町田原字石井（イヌガイマチタワラ イシイ）	44212	212661	33°03'03"	131°37'16"	2011.12.13 ～2011.12.14	15㎡	福祉施設建設
小原遺跡（オハル）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）清川町六種（キヨカワマチムクサ）	44212	212176	32°55'40"	131°30'09"	2012.07.17 ～2012.07.19	60㎡	市道改良工事
荻迫遺跡（オギザコ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）大野町杉園字中ノ原（オオノマチスギゾノ ナカノハル）	44212	212528	33°02'07"	131°31'36"	2012.12.10 ～2012.12.12	550㎡	農地造成
杉園中原遺跡（スギノゾナカハル）	豊後大野市（ブンゴオオノシ）大野町杉園字中原（オオノマチスギゾノ ナカハル）	44212	212525	33°02'07"	131°31'22"	2012.12.13 ～2012.12.15	700㎡	農地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
漆生古墳群	墳墓	古墳	前方後円墳・円墳・方形墳・石棺		重要遺跡確認
陣箱遺跡	散布地	弥生・古墳	竪穴住居跡	土器・石器	本調査実施
桜馬場遺跡	散布地				
宮山石幢	散布地				
高松遺跡	散布地	弥生	竪穴住居跡	土器	
石井庵跡	散布地				
小原遺跡	散布地				
荻迫遺跡	散布地				
杉園中原遺跡	散布地	弥生	竪穴住居跡	土器	

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書 4
平成 23 年度・平成 24 年度調査

発　行　日　2014 年 3 月 28 日発行
編集・発行　豊後大野市教育委員会
879-7131　豊後大野市三重町市場 1200